

序文

昨年度に引き続き、総合地球環境学研究所（地球研）において、2014年度から5年間の計画で Full Research (FR) を進めている個別連携プロジェクト「高分解能古気候学と歴史・考古学の連携による気候変動に強い社会システムの探索」（略称・気候適応史プロジェクト）の第2回目の成果報告書をお届けする。昨年度同様、2015年度のおもな成果を約1年遅れでご報告することになり、恐縮の至りである。FR3の年度末近くになってFR2の成果報告の原稿を執筆しているが、振りかえってみて、2015年度は、その後の研究の発展につながったさまざまなシーズが蒔かれた年であったということ、改めて実感している。

プロジェクトメンバーの方がたのほか、日本各地の埋蔵文化財調査機関の皆さんのご協力により、FR2の間に先史・古代から近代・現代までのさまざまな時代の木材年輪資料等の収集と分析が粘り強く進められた。そのなかで蓄積したデータは、その後の古気候復元と年輪年代決定の時空間被覆度の拡大と精度の向上、復元・調査の対象となる新しい気候要素や遺跡・遺物の開拓など、着実にプロジェクトの基盤を拡充することにつながってきた。FR2の間に系統的に進められた近世・中世の古日記・古文書史料の収集と、解説・翻刻の取り組みは、気候変動に対する社会応答を研究する新しい切り口をいくつも準備し、その後の新発見の数々につながるとともに、文字資料から古気候復元を行なう歴史気候学に貴重な新しいデータを提供し続けている。

こうした取り組みの背景には、FR2になって、プロジェクト自体がある意味で成長してきた、ということがあるように思われる。5年間のFRの中で初年度（FR1）の2014年度は、初めてプロジェクトの専属スタッフとなった研究員はもとより、全国の大学などに所属するプロジェクトメンバーの方がたにとっても、気候変動と日本史の関係を対象とした本プロジェクトの研究構想は未知のものであり、戸惑うことも多かったようである。地球研の中でも外でも、お互い噛み合った議論を進めていくことが難しそうであったように記憶している。しかし2年目（FR2）の2015年度は、当初のぎこちなさがかなり解消され、プロジェクトの目的と実際の研究内容について、多くの研究員やプロジェクトメンバーが活発な議論を交わせるようになってきた。

そうした中で、プロジェクトの理系メンバーによるデータの蓄積が進むだけでなく、歴史系メンバーの間で、古気候データを具体的に活用した各時代の史料の解析が始まるとともに、考古系メンバーのなかでも、酸素同位体比年輪年代法を用いた遺跡の年代決定やその気候変動との関係の議論が始められるようになってきた。本報告書にも、そうした方がたの研究成果が、幅広く収められている。5年間のプロジェクトも残すところ、あと2年余り。終了時において最大限の研究成果が得られるように、本報告書を手に取られたプロジェクトの内外の皆さまから、忌憚なきご意見・ご助言をいただければ、と願う次第である。

気候適応史プロジェクトリーダー

中塚 武